

日本学術会議 北海道地区会議ニュース

発行 日本学術会議北海道地区会議

No. 56
2026-3



「法人化準備を進める日本学術会議：学問と社会をつなぐ使命を果たし続けるために」

第26期北海道地区会議代表幹事
(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)

宇山 智彦

2025年5月13日に衆議院で日本学術会議法案が可決されたのに続き、6月11日に参議院でも可決されたことにより、日本学術会議は2026年10月1日に、現在の国の機関から、特殊法人に移行することになりました。

新法では外部からの監督・統制の仕組みが何重にも作られており、学術会議は繰り返し懸念を表明してきました。特に2025年4月の総会で、法案の修正を求める決議を採択しましたが、国会では残念ながら修正に至りませんでした。しかし審議の際に多くの議員が法案の問題点を詳細に指摘し、両院それぞれの内閣委員会で、政府に対して2020年の会員任命拒否問題についての説明責任、学術会議との信頼関係の構築、現行の学術会議の設立趣旨の尊重、学術会議の独立性・自律性および勧告・答申等の趣旨の尊重などを求める附帯決議が、与党の賛成も得て採択されたことは、学術会議に対する一定の理解を示したものとと言えます。

新法が成立した以上、学術会議としては、法人化後も最大限の独立性を保ちながら、人類社会の福祉への貢献や学問の自由の擁護といった使命を果たし続けられるよう、移行作業を行わなければなりません。2025年8月の幹事会決定により、法人化準備委員会および関連の3つの分科会が設置され、また会員全員による意見交換会も開催しながら、検討・準備を進めているところです。

会員任命拒否事件以来、学術会議を揺さぶってきた荒波は、通常業務の遂行の妨げとなったと同時に、学術界と政府や社会の関係のあり方、そして学術界自体のあり方について、多くのことを考えるきっかけとなりました。学術会議についての誤った情報と否定的なイメージが一部に広まったことについては、学術会議の広報の不足が指摘され、それはその通りですが、問題は恐らくもっと深いところにあります。

学問の自由や平和主義を含め、戦後の長い間常識であったさまざまな考え方が、もはや学術界と政府、社会の間で十分に共有されなくなっています。研究者同士でさえ、専門分化が進み、各人・各機関が研究資金の獲得と業績の向上といった短期的な課題に追われる中、学問の使命や社会との関係などの大きな問題について認識を共有することが難しくなっています。しかし社会が複雑化し、さまざまな問題についての既成の「正解」がなくなっているからこそ、学術界が社会と連携しつつ、圧力や忖度なしに、よりよい答えを自律的に追求していくことが、ますます重要になっています。

学問のあり方は世界的にも深刻な問題になっています。自由のない体制のまま超大国化しつつある中国からは、文系などで自由な研究環境を求めて日本に来る研究者や学生が少なからずいます。学問の最大中心であるはずのアメリカでも大学・研究者に強烈な政治的圧力がかけられる状況の中で、日本において学問の自律性と社会貢献を両立させることは国際的にも重要であり、科学者代表機関である学術会議はそのために役割を果たすべきでしょう。

日本学術会議北海道地区会議では、学術的な知見を社会に広め、社会的な課題を市民とともに考えるためのささやかな取り組みとして、学術講演会やサイエンスカフェを開催してきました。2025年度には、学術会議の第一部が函館で、第二部が札幌で夏季部会を開催したのに合わせ、それぞれの公開シンポジ

ウムを地区会議が共催しました。詳しくはニュース本号の記事を参照していただきたいのですが、第一部のシンポジウムでは、学術会議をめぐる問題でもその難しさが浮かび上がった「対話」の意味を、AIの進展がもたらす可能性や課題を念頭に置きながら、市民と共に考えました。第二部のシンポジウムでは、新興・再興感染症への備えという、社会的

重要性の高いテーマを取り上げました。

新法人の制度的な骨格は新法によって定められましたが、実質的・具体的に何が変わるのか、まだ見通せないところがあります。地区会議の活動を含め、学術会議が今後も学問と人類社会の発展や課題解決に貢献し続けられるよう、皆様に応援していただければ幸いです。

公開シンポジウム開催報告

北海道地区会議では、市民公開の講演会等を毎年開催しています。令和7年度は、8月7日（木）及び8月10日（日）に、会場とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

以下に、当日の講演内容を報告します。

「次の新興・再興感染症にどう備えるか」

日時：令和7年8月7日（木）

場所：北海道大学医学部学友会館「フラテ」フラテホール（札幌市）

報告：日本学術会議第二部会員
（北海道大学大学院医学研究院教授）

玉腰 暁子

日本学術会議第二部会員
（北海道大学大学院歯学研究院教授）

樋田 京子

日本学術会議第二部会員
（北海道大学大学院医学研究院特任教授）

渡辺 雅彦

自然界の野生動物が保有する病原体が社会に侵入し、人へと伝播する人獣共通感染症は、近年頻繁に発生し国際社会問題となっている新興・再興感染症の大半を占めており、いまだ根絶が困難な喫緊の課題です。本シンポジウムは、人獣共通感染症対策、ワクチン開発、創薬、構造解析、数理モデル、公共政策の専門家が最新知見を共有し、次の新興・再興感染症にどう備えるかについて、市民の理解と地域レジリエンス強化を図るために企画しました。



総司会：玉腰 暁子

(1) 開会挨拶

13:00~13:10

宇山 智彦

寶金 清博（日本学術会議連携会員・北海道大学総長）

(2) 基調講演

座長 渡辺 雅彦

13:10~13:50 「次のパンデミックに備える ～インフルエンザとCOVID-19の経験を踏まえて～」

喜田 宏（北海道大学ユニバーシティープrofessor、同大学人獣共通感染症国際共同研究所特別招聘教授・統括、同大学総合イノベーション創発機構ワクチン研究開発拠点特任教授）

(3) 講演

座長 澤 洋文 (北海道大学総合イノベーション創
発機構ワクチン研究開発拠点教
授・拠点長兼生体応答解析部門長)

樋田 京子

13:50~14:10 「人獣共通感染症に対する対策」

澤 洋文

14:10~14:30 「クライオ電子顕微鏡を用いた抗ウ
イルス薬・ワクチンの研究開発」

前仲 勝実 (北海道大学大学院薬学研究院創薬科
学部門生体分子機能学研究室教授、
人獣共通感染症国際共同研究所病原
体構造解析部門)

14:40~15:00 「新興感染症への疫学インテリジェ
ンス提供の問題点と未来」

西浦 博 (京都大学大学院医学研究科附属ヘルス
セキュリティセンター危機インテリ
ジェンス部門教授)

15:00~15:20 「高病原性ウイルス研究者である公
衆衛生医師の視点からCOVID-19
流行対策を振り返る」

西條 政幸 (札幌市保健福祉局医務・保健衛生担
当局長、国立感染症研究所(名誉所
員))

(4) 総合討論

15:20~15:50

モデレーター 渡辺 雅彦、玉腰 暁子、樋田
京子

パネリスト 喜田 宏、澤 洋文、前仲 勝実、
西浦 博、西條 政幸

(5) 閉会挨拶

15:50~16:00

神田 玲子 (日本学術会議第二部部長/国立研究
開発法人量子科学技術研究開発機構
理事)

最初に、北海道地区会議の宇山代表幹事及び北海
道大学の寶金総長が開会挨拶を行いました。



挨拶をする宇山代表幹事



挨拶をする寶金総長

続いて、基調講演及び4つの講演が行われました。
各講演の要旨は次のとおりです。

基調講演 「次のパンデミックに備える ~インフル
エンザとCOVID-19の経験を踏まえて~」
喜田 宏



講演をする喜田ユニバーシティプロフェッサー

半世紀に亘りインフルエンザウイルス（IFV）の生態を研究し、IFVの存続機構とパンデミックインフルエンザウイルス（PdmIFV）の出現機構を解明した。

A/Hong Kong/68（H3N2）PdmIFVは、鴨のIFVのHA遺伝子が人のアジア型（H2N2）IFVに組み込まれた遺伝子再集合体である。1918年、1957年と2009年に出現した、H1N1、H2N2とH1N1 PdmIFVも、鴨のIFVと人の季節性IFVが豚の呼吸器に同時感染して生じた遺伝子再集合体で、それぞれのHA遺伝子は鴨のIFVに由来する。

以上の知見に基づき、パンデミック、季節性と鳥インフルエンザのワクチンと診断のために、すべてのHAとNA亜型の組み合わせ（16 X 9）144通りのA型IFV 5,645株とその遺伝子のライブラリーを構築した。

このライブラリーのH1N1、H2N2、H4N6、H5N1、H6N2、H7N7、H7N9およびH9N2ウイルスで不活化ウイルス全粒子ワクチンを試製した。いずれも、ニワトリ、マウスおよびサルに高い免疫を誘導することを確認した。即ち、新たなHAまたはNA亜型のIFVがパンデミックを起こしても、ワクチン製造IFV株を提供できる。

2009年のH1N1 PdmIFVとSARS-CoV-2は消滅することなく、インフルエンザとCOVID-19の同時流行を起こしている。私達はSARS-CoV-2の培養、不活化と精製条件を最適化し、安全で高い免疫を誘導するCOVID-19ワクチンの試製に成功した。現在、インフルエンザとコロナウイルス感染症不活化ウイルス完全粒子混合ワクチンの開発を進めている。年一回の接種でインフルエンザとCOVID-19両感染症の予防に有効な不活化ウイルス完全粒子混合ワクチンを実用化し、世界に供給することが目標である。

講演1 「人獣共通感染症に対する対策」

澤 洋文



講演をする澤教授

人獣共通感染症は、野生動物に感染している病原体が人に伝播して発症する感染症である。近年の人口増加や環境の変化により、野生動物と人間の接触の機会が増えており、インフルエンザ、COVID-19などの人獣共通感染症が国際社会で蔓延している。

人獣共通感染症は動物に感染しているため排除することは不可能であることから、伝播経路の解明、病原性の発現機構の解析、予防・診断・治療法の開発の3本の柱で先回り対策を講ずることが必要である。北海道大学は、ザンビアに拠点を設置し、野生動物であるコウモリや節足動物などを対象として病原体の探索と伝播経路の解明を進めている。

また、ウイルス等の人獣共通感染症病原体の病原性発現機構の解析を実施し、さらに基礎研究で得られた結果を基にして予防・診断・治療法の開発を推進している。特筆すべき成果としては塩野義製薬と長年にわたり共同研究を実施しており、その成果の一つとして、COVID-19に対する日本発の経口抗ウイルス薬であるエンシトレイビルを社会に実装した。また、日本医療研究開発機構（AMED）のワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業の下、2022年10月にワクチン研究開発拠点を設置した。

講演2 「クライオ電子顕微鏡を用いた抗ウイルス薬・ワクチンの研究開発」

前仲 勝実



講演をする前仲教授

北海道大学大学院薬学研究院では、創薬研究教育センターを拠点に、クライオ電子顕微鏡（Cryo-EM）を活用した抗ウイルス薬とワクチンの研究開発を進めている。

2010年の設立以来、AMEDや文科省の支援を受け、創薬基盤の整備を進めてきた。特に「BINDS」事業を通じて、化合物ライブラリーの構築や構造解析技術の強化が図られている。COVID-19の初期には感染研と連携し、既存薬の提供や広域抗ウイルス化合物の探索を迅速に実施。現在では5000種以上の化合物を保有し、MPOXなど新興感染症にも対応可能な体制を整えている。

Cryo-EMは、ウイルス表面のスライタンパク質などの詳細な構造解析に不可欠であり、抗体の結合部位や変異株への対応に貢献している。BSL-3環境下で生ウイルスの構造を直接観察することにも成功し、揺らぎや開いた構造など、従来の固定化タンパク質では得られなかった情報を取得。これにより、より現実的なワクチン設計が可能となった。国内外の研究機関との連携や教育活動も積極的に展開し、アジア諸国の学生への支援も行っている。次のパンデミックに備え、構造解析・創薬・教育の体制を強化し、国際的な貢献を目指している。

講演3 「新興感染症への疫学インテリジェンス提供の問題点と未来」

西浦 博



講演をする西浦教授

COVID-19パンデミックの発生直後、厚労省でクラスター対策班を組織し、リアルタイムの政策助言を行った。日本のCOVID-19対策は抑制政策（サプレッション）を採用し、接触を制限することで流行時の医療逼迫を回避しながら、特異的な予防（ワクチン）や治療を待つ戦略をとった。第2波では緊急事態宣言を出さず、夜間営業時間短縮などハイリスク層への対策で実効再生産数を1未満に抑えた。ワクチン接種が進むにつれ、人口内の潜在死者数は大幅に減少し、対策緩和に繋がった。

感染症疫学では、集団の感染状況が個人の感染リスクに直結する。特殊性が高く、数理モデルや危機管理学の理解が望ましい。至急のフィードバックに大局的に成功したものの、対策緩和後に国主導の総括会議は未だに開催されていない。また、科学的知見を反映するパスウェイや研究者と行政の不公平な関係性など、課題は山積している。

危機対応を各セクターで円滑に進めるために、京都大学でヘルスセキュリティセンターを設置した。感染症や自然災害に対応できる人材育成と体制整備を進めている。行政側のリスクリングも必要であり、コンピテンシーの設定に向けた学術界の支援が求められる。

講演4 「高病原性ウイルス研究者である公衆衛生
医師の視点からCOVID-19流行対策を振
り返る」

西條 政幸



講演をする西條局長

COVID-19はSARSと類似したコウモリ由来のウイルス感染症であり、呼吸器感染症というよりも全身感染症としての性質が強く、肺以外の臓器にも影響を及ぼす。特に重症者では免疫異常や多臓器感染が見られ、エボラ出血熱のように致命率の高い重篤な動物由来ウイルス感染症と捉えられる。

2021年春には日本でも高齢者へのmRNAワクチンの接種が始まり、札幌市では高齢者の致命率が劇的に低下。未接種の60歳以上の高齢者では致命率が30%、透析患者では50%に達するなど、極めて重篤な感染症であったが、ワクチン接種者で亡くなる方が減少するなど、ワクチンの効果は明白だった。

一方、隔離政策には課題も多く、ひとたび陽性者になると適切な医療にアクセスできない、介護支援が止まる、社会的非難を受けるなどの問題が発生。感染症は「生きる行為」に関わるものであり、それだけに感染リスクから逃れることは難しい。感染症対策は科学的根拠に基づく対策であると同時に、人間性や尊厳を損なわない形で行うべきである。患者の尊厳が尊重され、患者が病原体に感染したことが非難されることのない、患者に優しい社会にすることが今後の課題である。

続いて行われた総合討論では、参加者からの質問を中心に、各講演者から説明がなされました。

本公開シンポジウムは、345名（うちオンライン265名）の方にご参加いただきました。参加者からのアンケートでは、「今後もこのような公開型のシンポジウムを通じて、科学的知見の共有と社会的対

話がさらに進むことを期待しています」、「今回の情報は、医学全般に関しての大変重要な内容だと思います。感染症は、一部の医学の分野としてではなく、新興感染症に興味をもつ国民全体が学び、知る必要があると思います」、「教訓を踏まえた貴重なご発表を聞くことができ有意義だった」など好評でした。

公開シンポジウムは、神田理事の閉会挨拶で幕を閉じました。



閉会挨拶をする神田理事

「AI時代に「対話」の意味を考える
—熟議がつむぐ知と社会—

日時：令和7年8月10日（日）

場所：函館市亀田交流プラザ 講堂（函館市）

報告：日本学術会議第一部会員

（北海道地区会議代表幹事／北海道大学スラ
ブ・ユーラシア研究センター教授）

宇山 智彦

AIの急速な進展は、私たちの生活や社会の在り方に大きな変化をもたらしつつあります。その中で、他者と「対話する」ことの意味や可能性も、あらためて問われています。本シンポジウムでは、「AI時代に『対話』の意味を考える—熟議がつむぐ知と社会」と題し、歴史学・哲学・地域研究・言語学・法学・社会学という多様な視点から、対話の意義や課題について議論しました。

過去と向き合うこと、異なる文化や価値観を理解すること、社会のルールを築くこと——こうした営みの根底には、常に「対話」が存在しています。第一部では各分野の専門家から、対話をめぐる多様な論点を提示し、それを踏まえ、第二部では哲学対話の手法を用いて、参加者とともに「AI時代の対話」について深く考えました。

なお、本公開シンポジウムは、「はこだて国際科学祭2025」のプレイベントとしても開催しました。

.....
司会進行：中村 征樹（日本学術会議第一部会員／大阪大学全学教育推進機構教授）

(1) 開会挨拶

9：30～9：35

日比谷 潤子（日本学術会議副会長・第一部会員／国際基督教大学名誉教授）

(2) 第一部 シンポジウム

「AI時代に『対話』の意味を考える」

9：35～10：40

趣旨説明

美馬 のゆり（日本学術会議第一部会員／公立はこだて未来大学システム情報科学部教授）

宇山 智彦

話題提供① 歴史学から

「昔の人びとの声を聴く：歴史との対話から見えること」

大橋 幸泰（日本学術会議第一部会員／早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

話題提供② 哲学から

「AIの時代に、人間って何?: 哲学から考える対話の力」

河野 哲也（日本学術会議第一部会員／立教大学文学部教育学科教授）

話題提供③ 地域研究から

「難しい相手と、どうすれば話し合える?: 世界の地域紛争から学ぶ対話」

宇山 智彦

話題提供④ 言語学から

「通じたと思っても通じてない?: ことばとコミュニケーションの不思議」

定延 利之（日本学術会議第一部会員／京都大学大学院文学研究科教授）

話題提供⑤ 法学から

「社会のきまりはどう生まれる?: 対話からどうやって合意を作るのか」

只野 雅人（日本学術会議第一部副部長／一橋大学大学院法学研究科教授）

話題提供⑥ 社会学から

「文化の違いをどう乗り越える?: 異文化理解から始まる対話」

岩井 紀子（日本学術会議第一部会員／日本版総合的社会調査共同研究拠点大阪商業大学JGSS研究センターセンター長）

(3) 第二部 哲学対話

参加者と考えるAI時代の「対話」の意味

10：50～11：45

進行：河野 哲也

(4) 閉会挨拶

11：45～11：50

吉田 文（日本学術会議第一部部長／早稲田大学教育・総合科学学術院教授）



美馬教授による趣旨説明の様子

市民参加型のこのシンポジウムへの期待が込められた開会挨拶および趣旨説明の後、6つの専門分野の観点からのトーク（話題提供）がなされました。



話題提供をする河野教授

対話やコミュニケーション、ルールなどのあり方を考えるトークと、歴史資料や地域紛争、異文化理解などの具体例に沿ったトークが補い合って、AIなどの技術の進歩と社会の複雑化が並行する今の時代における対話の意義と難しさが浮き彫りになりました。



話題提供をする宇山教授

第二部の哲学対話は、参加者全員で話し合っテーマを決めてから、グループに分かれ、車座になって順々に発言しながら意見交換する形で進められました。各グループは一般市民と学会会員がバランスよく入るようにして構成されました。

話の通じない相手とどう向き合うかが統一テーマになり、各人が自分の体験を交えながら熱心に話し合いました。特に、高校生など若い人たちが積極的に発言する姿が目立ちました。対話の終了後、各グループでの議論の内容を紹介し合いました。時に笑

いも沸き起こる中、極めて多様な議論の紹介に皆、聞き入っていました。常識や思い込みを反省しながら、他者の話に耳を傾けることが重要であるという認識を共有できました。



第二部哲学対話の様子

最後に、吉田教授から閉会の挨拶が行われました。

本公開シンポジウムには247名（うち、オンライン197名）の方にご参加いただきました。全体として、専門的な話と身近な話題を行き来しながら、研究者と市民が楽しく対等に対話する、意義深い催しになったと思われます。

令和7年度実施の地区事業（実施分）

○公開シンポジウム

令和7年8月7日（木）

北海道大学医学部学友会館「フラテ」

フラテホール（札幌市）

「次の新興・再興感染症にどう備えるか」

参加者345名（うちオンライン265名）

令和7年8月10日（日）

函館市亀田交流プラザ 講堂（函館市）

「AI時代に「対話」の意味を考える—熟議がつむぐ知と社会」

参加者247名（うち、オンライン約197名）

概要は公開シンポジウム開催報告を参照

○北海道地区会議運営協議会

①令和7年5月26日（月）文書開催

議題1 日本学術会議公開シンポジウム「AI時代に「対話」の意味を考える」の開催について

議題2 日本学術会議公開シンポジウム「次の新興・再興感染症にどう備えるか」の開催について

②令和7年12月22日（月）北海道大学（札幌市）

議題1 日本学術会議サイエンスカフェの実施について

③令和8年2月27日（金）（文書開催）

議題1 令和8年度事業計画について

報告1 令和7年度日本学術会議北海道地区会議事業実施報告について

第26期地区会議構成員

第26期北海道地区会議は会員および連携会員で構成されている。

[会 員]

有村 博紀 第三部会員（北海道大学大学院情報科学研究所・教授）

宇山 智彦 第一部会員（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授）

河原純一郎 第一部会員（北海道大学大学院文学研究所・教授）

倉本 圭 第三部会員（北海道大学大学院理学研究所・教授）

玉腰 暁子 第二部会員（北海道大学大学院医学研究所・教授）

樋田 京子 第二部会員（北海道大学大学院歯学研究所・教授）

美馬のゆり 第一部会員（公立はこだて未来大学システム情報科学部・教授）

渡辺 雅彦 第二部会員（北海道大学大学院医学研究所・特任教授）

[連携会員]

網塚 浩 北海道大学大学院理学研究所・教授

石塚真由美 北海道大学大学院獣医学研究所・教授

泉 典洋 北海道大学大学院工学研究所・教授

上田 佳代 北海道大学大学院医学研究所・教授

白杵 勲 札幌学院大学人文学部人間科学科・教授

内山 幸子 東海大学国際文化学部地域創造学科・教授

大野 宗一 北海道大学大学院工学研究所・教授

大場 雄介 北海道大学大学院医学研究所・教授

岡部 聡 北海道大学大学院工学研究所・教授

小川美香子 北海道大学大学院薬学研究所・教授

尾崎 一郎 北海道大学大学院法学研究科・教授

片桐 由喜 小樽商科大学・教授

加藤 重広 北海道大学大学院文学研究所・教授

菊地 優 北海道大学大学院工学研究所・教授

北 裕幸 北海道大学大学院情報科学研究所・教授

- | | | | |
|--------|---|-------|------------------------------------|
| 後藤 貴文 | 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授 | 三浦 誠司 | 北海道大学大学院工学研究院・教授 |
| 齊藤 正彰 | 北海道大学大学院法学研究科・教授 | 南 雅文 | 北海道大学大学院薬学研究院・教授 |
| 櫻井 晃洋 | 札幌医科大学医学部遺伝医学・教授 | 見延庄士郎 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 |
| 迫田 義博 | 北海道大学大学院獣医学研究院・教授 | 村井 祐一 | 北海道大学大学院工学研究院・教授 |
| 笹木 敬司 | 北海道大学電子科学研究所・教授 | 村上 正晃 | 北海道大学遺伝子病制御研究所長・教授 |
| 佐藤 典宏 | 北海道大学病院病院長補佐／臨床研究開発センター長・特任教授 | 村越 敬 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 |
| 澤村 正也 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 | 森本 淳子 | 北海道大学大学院農学研究院・教授 |
| 信濃 卓郎 | 北海道大学大学院農学研究院・教授 | 山内 太郎 | 北海道大学大学院保健科学研究院・教授／環境健康科学研究教育センター長 |
| 清水真理子 | 国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所寒地農業基盤研究グループ資源保全チーム・主任研究員 | | |
| 相馬 雅代 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 | | |
| 高橋 素子 | 札幌医科大学医学部医化学講座・教授 | | |
| 武富 紹信 | 北海道大学大学院医学研究院・教授 | | |
| 田高 悦子 | 北海道大学大学院保健科学研究院・教授 | | |
| 但野 茂 | 北海道大学大学院保健科学研究院・客員教授／北海道大学名誉教授 | | |
| 田中 伸哉 | 北海道大学大学院医学研究院・教授 | | |
| 中小路久美代 | 公立はこだて未来大学システム情報科学部情報アーキテクチャ学科・教授 | | |
| 長野 克則 | 苫小牧工業高等専門学校・校長 | | |
| 西野 吉則 | 北海道大学電子科学研究所・教授 | | |
| 西村 正治 | 北海道呼吸器疾患研究所・理事長／豊水総合メディカルクリニック・医師／北海道大学名誉教授 | | |
| 庭山 聡美 | 室蘭工業大学大学院工学研究科しくみ解明系領域・教授 | | |
| 野口 伸 | 北海道大学大学院農学研究院院長・教授 | | |
| 橋本 雄一 | 北海道大学大学院文学研究院・教授 | | |
| 長谷山美紀 | 北海道大学大学院情報科学研究院・教授 | | |
| 波多野隆介 | 北海道大学名誉教授 | | |
| 平野 高司 | 北海道大学大学院農学研究院・教授 | | |
| 藤田 修 | 北海道大学大学院教育推進機構・特任教授 | | |
| 藤田 知道 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 | | |
| 藤山 文乃 | 北海道大学大学院医学研究院・教授 | | |
| 古屋 正人 | 北海道大学大学院理学研究院・教授 | | |
| 寶金 清博 | 国立大学法人北海道大学総長 | | |

(氏名は五十音順)

日本学術会議北海道地区会議事務局
 北海道大学研究推進部研究振興企画課
 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目
 電話(011)706-2155 FAX(011)706-4873